ティー・ブレイク

NO. 80

日 露 戦 再 考

「かの小賢しき黄色いサルたちを懲らしめよ」と言って大艦隊を日本に差し向けたのは，当時のロシア皇帝ニコライ２世である。そのときに軍港として設けられたのがウラジオストックで，これはそのまま「東方を征服せよ」という意味のロシア語である。ウラジオストックの東方に在る国というのは１つしかないのであるから，その意味たるや，明確すぎるほどに明確である。

かの日本海海戦において大日本帝国の連合艦隊がバルチック艦隊を破ったことについては，その内容をよく知らない人が「遥かアフリカの喜望峰を回ってきて疲れ切っている艦隊と，日本を直ぐに飛び出て生き生きとしている艦隊とでは，士気が違う。初めから勝敗の分かっていた戦であって，論評をする価値すらない」などと言うこともあるが，それは大きな誤りである。それは，日本の連合艦隊に課せられた責務は「バルチック艦隊に勝つこと」ではなく，「バルチック艦隊を，一隻も残さずに沈めること」にあったからである。

バルチック艦隊を一隻でも残してそれをウラジオストックに入港させてしまったとしたら，日本から満州への海路補給線が断たれ，日露戦を戦っている満州の軍隊が枯れてしまうことになる。であるから，ロシア側の狙いは「たったの一隻でもよいから，軍艦をウラジオストックに入港させること」にあり，日本側の責務は「一隻も残さずに沈めること」にあったのである。

しかしながら，当時においては「戦艦というものは沈めることが出来ない」というのが常識だったのである。それ以前の海戦では，例えばかの有名なトラファルガー沖の海戦でも，戦っていたのは木製の帆船であり，鋼鉄製の戦艦同士が戦う「近代戦」というのはこれが始めてのものであり，全世界がその行方に着目していたのである。

そうして，殆どの人は「日本が負ける」と思っていた。それは，沈まないと言われている戦艦の数が日本のそれの 1.5 倍であり，しかも，ウラジオストックに入港するルートが，果たして対馬海峡を通ってのものなのか津軽海峡を通ってのものなのか，全く分かっていなかったからである。

ところが，日本は，勝った。自らの 1.5 倍のバルチック艦隊を，一隻も残らずに日本海の底に沈めた。もちろん，これには色々な要因があったが，誰もが「不可能」と言った目的を達成して，開戦当初の予定通り，日露戦争は，日本に有利な形で講和に持っていくことが出来た。

これと同じような出来事が，今年は起きた。言うまでもない。サッカーのワールドカップである。あの日の日本は，強豪ロシアを破った喜びに沸いた。思えば，4 年前は予選で 3 戦全敗。3 試合全体でたったの 1 点しか取れなかった。総合成績は，32 国中で 31 位。

けれども，今年の日本は強かった。選手達の 4 年間の努力もさることながら，国民全体の意識が違う。

こうした状況を見て，隣の芝生を見たからというわけではないが，我々の業界も，「世界に通用する実力を」と強く思わずにはいられなかったのである。　（正）